

2026 年度 1Q 決算説明会 主な質疑応答
(2026 年 8 月 7 日開催)

<全体>

Q1：DPE に関連する特別損失を 1Q で 47 億円計上しており、2Q 以降も一定の特別損失を見込んでいるが、昨年同様、今年度も特別利益で補填することは可能か？

A1：今期についても、政策保有株式の売却益などの特別利益を計上することなどで補填する方針である。

Q2：1Q の在庫影響がプラス 60 億円とのことだが、上期ではどのように見込んでいるのか？

A2：上期でもプラス 60 億円程度を見込んでいる。2Q は、12 月決算であるシンガポール子会社の樹脂製品において在庫影響がプラスで発生する一方、原料価格の下落に伴いマイナスの在庫影響が生じる製品もあるため、在庫影響が相殺される見通しである。

Q3：中東情勢の影響に起因する原材料の調達制限による減産影響として、期初予想で営業利益にマイナス 50 億円の影響を見込んでいたが、現状の見通しはどうか？

A3：シンガポールで製造しているアセチレンブラックについては、期初予想では 9 月末までの影響を織り込んでいたが、現時点で先行きは不透明であり、期初予想から下振れする可能性がある。一方で、その他の製品への大きな影響は出ていないことから、現時点では 50 億円のうち約半分程度の影響を見込んでいる。

<電子・先端プロダクツ>

Q4：軟質系スネクトンの今後の見通しは？

A4：ユーザーにおける次世代グレード立ち上げについては、銅張積層板（CCL）の構成材料である低誘電ガラスクロスの不足がリスクとなっている。一方で、台湾・中国系ガラスクロスの採用が進み始めており、2026 年末頃から立ち上がる見込みである。そのため、軟質系スネクトンについても 2027 年以降、順次採用が進むと想定をしている。

Q5：硬質系スネクトンについて、「優位性が最も活かせる高付加価値用途での展開を検討中」とあるが、検討状況は？

A5：硬質系樹脂の分野には競合製品が多く存在するため、マーケット全体を狙うのではなく、低 CTE や優れた寸法安定性といったスネクトンの強みを活かせる用途に絞った展開を検討している。

Q6：開発品である「低誘電樹脂フィラー」の狙いは？

A6：PFAS フリーである特徴を活かし、モディファイドポリイミド（MPI）をベースとした FCCL（フレキシブル銅張積層板）で使用されている PTFE フィラーの代替用途を想定している。

また、リジット CCL 向けでは、無機フィラーと併用することで、無機フィラー単独では調整が難しい Dk（誘電率）を低減することが可能である。

有機フィラーと無機フィラーの両方を保有する当社ならではの開発品であり、今後さらに改良を進め、樹脂系インターポーザーなどへの展開も検討していく。

Q7：中東情勢に起因する原材料の調達制限による減産影響で、下期もシンガポール工場のアセチレンブラックにマイナス影響が発生する見込みとのことだが、影響を最小化する対策はないのか？また回復の目途は？

A7：シンガポールで製造しているアセチレンブラックの主な用途は高圧ケーブル向けであり、大牟田工場からの供給で代替が可能である。生産能力には限りはあるものの、可能な限り供給を補完していく方針である。

また、現時点では調達先工場の稼働回復時期に関する情報は確認できていない。

<ライフイノベーション>

Q8：抗原迅速診断キットの販売減少により、上期営業利益予想を期初予想の30億円から10億円へ20億円下方修正しているが、下期の見通しは？

A8：抗原迅速診断キットについては、上期同様、下期も感染症流行に伴う検査需要の減少により業績が下振れする可能性があるものの、現時点では不透明である。2Q決算発表時に、各種要因を踏まえて業績予想の見直しを行う予定である。

<エラストマー・インフラソリューション>

Q9：今年度のクロロプレンゴムの需要環境をどのように見ているのか？

A9：1Qは先取り需要があったため、2Qはその反動で需要が弱含んでいるが、通期では計画通りの販売数量を確保できると見込んでいる。

<ポリマーソリューション>

Q10：スチレン関連事業の分社化について、2027年4月を目途としていたが、進捗状況はどうか？

A10：2026年2月に公表したとおり、2027年4月の分社化に向けて検討を進めている。

以上